

カール・ビュヒアー『国民経済進化論』第二集

——淡川康一教授の訳業について——

高橋良三

頃日、カール・ビュヒアー (Karl Bücher) の名著 Die Entstehung der Volkswirtschaft, の II が、本学教授・淡川康一博士の手によって『国民経済進化論・第二集』と題して訳出され、書肆雄渾社から発売された。本書の第一集に当る部分は、夙に、権田保之助氏によって訳出され、『経済的文明史論』(後に『国民経済の成立』と改題)と題して出版されていたもので、爾来、多年に亘って第二集の翻訳刊行が待望されていたものであった。いま、淡川教授が原書の出版元から直接オーソライズされた訳業の成果を手にして、それが私のひそかに期待していたより以上のものであったことに一驚するとともに、脱帽を禁じえなかつたのである。ただし、訳筆の正鵠適切な点については、訳者が独逸語に堪能である

ことをよく承知しており、本訳書を手にするまでもなく信頼していたのでその成功を疑わなかつたが、一読してまさに私の信頼が裏切られなかつたことを喜ぶことができた。しかし、私が訳著書に脱帽して敬意を表したのはこの点にあるのではなくて、むしろ、巻末に掲載された五篇の「附録」にあつたのである。

私は本訳書を手にして直に筆を執り、従前から多少の関心を抱いているビュヒアーについて、この書を媒介として若干の紹介を試みようと思ひ立つたのであつたが、この「附録」を一読するに及んで、私が試みようとしたことが全くの蛇足をすぎないものであることを思ひ知らされたのであつた。カール・ビュヒアーの伝記と学风については「附録」の(三)にお

いて明かにされており、また、訳者がこの書の題名を直訳風に『国民経済の成立』としないで、なぜ『国民経済進化論』と表題したかの事情については、「附録」(三)の『国民経済進化論』の篇次について」において、第一集中の諸論文と併せて考察しながら、原著者が独逸歴史学派の伝統に立ちつつも、歴史主義のもつ相対主義的弱点を克服しようと努力した跡を吟味した上で、それが固有する進化論的立場を把住した消息を明かにしているのである。もっとも、この点に関しては「附録」(一)の「カール・ビュヒアーの学説の根底をなすもの」において、より抱括的に精説されている。ビュヒアーの主著『国民経済進化論』第一・二集を読もうとするものは、まず、以上の三篇を読むことによって「入門」の扉を拓くことができるというものである。

惟うに、ビュヒアーはその経済史研究において、かれ独特の経済発展段階説を構成した人として知られているのであるが、それはしばしば年代的時代区分として誤解されて、かれの真意とする史的認識における方法的意義が没却されるのである。かれの学説を貫串する史観と方法を、訳者の懇切な研究を通じて、予め了解しておくことによって、一見、無体系

にみえる本書にも、容易に、しかも正確に接近することができるであろう。ビュヒアーは、その著書にあらわれているように、いわゆる体系屋(system-monger)ではない。あらかじめ形式的体系を立てておいて、文章をはめ込んでいくことによって、何か学術的著作らしい体裁の書物を作りあげるといった術学者ではない。自らが課題とするものと四つに組んで、豊富な資料を自己の方法によって処理することによって、独自の見解をまとめあげるといった仕方の学者である。その研究分野も経済史から社会学に涉って極めて広汎であり、叙述には繰返しや重複も少くない。形式的な体系は乏しいけれども、個々のモノグラフがそれぞれ彼独自の学術体系によって内面から堅確に支えられている作品であることは、本書を通読するだけでも十分納得することができるはずである。こうしたかれの学風はかのマクス・ウェーバーにも一脈相通するものがあって、どちらも私の好きなタイプの学者であり、早くから両者の著作には親んで来たものである。

といえば、附録の(四)の「カール・ビュヒアー著『労働と律動』における本邦関係の記事」も短篇ながら、訳者の関心と資性を顕わす好篇である。この『労働と律動』については、

私も戦前「経済と芸術との交渉」というエッセイを書いた
(「法と経済」六卷三号昭和十一年九月刊所載) 中で一寸ふ
れたことを想い出すのであるが、この博渉した資料に基く実
証的研究は、彼がただの経済史家でなく、広い視野と鋭い洞
察力をもつ社会経済学者であることを如実に物語るものであ
る。しかも、『国民経済進化論』の中で彼が採りあげている
主題とその行論のはこびをみても、かれがただの社会経済史
家というに止まらず、洵にユニークな文明批評家であること
を知るのである。かつて、第一集の訳者・権田氏が、これを
「経済的文明史論」と名付けて上梓されたのも、また一個の
見識であつたとさえ思わせるものがあるのである。

ビュヒアーは、今日の経済学界の流れからいえば、明に傍
流ともいふべきものであろう。訳者の好みに即していえば、
明かにワキ役であり、宝生流である。しかし、宝生が演能に

あたつてなくてかなぬ流派であるように、社会経済史の領
域に探求の斧を入れる者にとつては、必ずこれを顧み、これを
推進のことしななければならないものを持つてゐるのがビュ
ヒアーではなからうか。こうした学者の主著が、この度、淡川
教授のすぐれた訳著「第二集」を得ることによつて、完訳の
形で、この国の学界に共同財産を加えることになつたのであ
る。きくところによると、本訳著は、このほど全国図書館協
会の推薦図書として指定された由である。協会もまたその選
定を誤らなかつたといふべきである。最後に望蜀の一事と
をつけ加えるとすれば、附録(四)にあげられているビュヒアー
関係の本邦文献において、当然掲げられるべくして脱漏され
たものがあつたのではないかといふことであるが、これはも
とより瑕瑾というにも値いしないものであるといえよう。